

「京都編」

宮津で見つけた

日本の原風景の空気感と豊かさ

長澤雅彦 映画監督

初めて宮津を訪れたのは六年前。映画「天国はまだ遠く」のロケハンだった。もともと原作小説の舞台の街だが、いったんシナリオを書き、自分なりのイメージを持って訪れた。先に現地を見て現実の風景をそのまま描いても意味がない。やはり自分のつくりたいイメージを固めてから、それを広げてくれる場所を探すという順序だ。宮津には求めていたものがあつた。海と山、田や畑、日本の原風景があり、「光」、光線の具合、風景を包む空気感がすごく良かった。

穏やかな内海に面し、白砂青松の美しい砂浜が続き、近くに山が迫る。麓では緑が繁っているのに、山頂では紅葉が始まっていたりして、季節の変化を目の当たりにできる。「弁当忘れても傘忘れるな」という地元の言葉どおり、天候は変わりやすいが、短い雨があがつたあとは美しい虹が出る。移ろいゆく季節のなかで自然とともに生きる人を描き、人間も自然の一部だというのが映画

の一テーマだったので、やはり宮津でないとダメだと思った。

撮影は三年前の秋、一カ月半滞在した。宮津といえば天橋立が有名だが、それは魅力の一部にすぎない。四季折々の風景、豊かな食、そして人の温かさ——撮影を見守り、必要な時には惜しみなく手を貸してくれた地元の人々。お母さん方の炊き出しに、ふだんロケ弁当ばかりの俳優やスタッフは喜び、つい食べ過ぎて太ってしまったほどだ。海の幸も魅力だが、米がまた美味しい。宴会シーンで、カニ、ブリ、黒ちくわなど地元食材をずらりと並べてもらい、何がいちばん美味しいかと地元の人に問うと、「塩むすび」と口を揃える。米どころ秋田で育った私だが、丹後米の味には正直驚いた。

宮津でのロケ中は、ある意味、世間と隔絶されていた。インターネットも携帯電話も通じにくく、それらがなくても十分生きていけることがわかった。ゆったりと懐の



大きい宮津にいと、商業的發展だけが豊かさではないと気づく。だから映画ではお金では買えない豊かさがある街・宮津を表現したつもりだ。地元の若い人たちはもつと自分の街に誇りを持っていると思う。

「よくこんな遠い所まで」と宮津の人は言う。東京から五時間、京都市内からも二時間と決して近くはない。でも、ここまで来ないと手に入らないものがある。だから、ああ、やつと着いたという喜びはひとしおだ。映画では秋を描いたが、海が輝く夏はまた素晴らしい。どうしても描きたかったので、この映画のスピノフ短篇を夏の宮津で撮った。それは私にとって人生最良の夏になった。 曜



ながさわ まさひこ 映画監督
1965年秋田県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。2001年「ココニイルコト」で藤本賞新人賞など受賞。監督・脚本作品に「ソウル」「13階段」「夜のピクニック」など。2008年秋、宮津を舞台にした「天国はまだ遠く」とそのスピノフドラマ「わたしが死んでも世界は動く」を公開。劇場用長篇映画のほか、CM、短篇映画なども手がける。
<http://www.bookcafe.jp/nagasawa/index.html>